

Multi-layered Language Environment Studies International Symposium (Online)

多層言語環境研究国際シンポジウム（オンライン開催）

多様性と言語 (Diversity and Language)

プログラム

2021年2月21日（日）（日本時間）

February 21, 2021 (Sunday), Japan Time.

主催：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院

科学研究費補助金基盤研究(B) 一般（課題番号：19H01276）

「多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略」

問合せ先：河合靖（北海道大学）ykawai@imc.hokudai.ac.jp

2021年2月21日（日）（日本時間）February 21, 2021 (Sunday), Japan Time.

オンライン開催（アクセス情報は、申し込み者にメールで送信します）

午前の部

講演（Lecture）（10：00～12：00）

講師：レベッカ・L・オックスフォード（メリーランド大学名誉教授）

Dr. Rebecca, L., Oxford (University of Maryland、Professor Emerita)

演題：Weaving Peacebuilding into Language Teaching and Learning（平和構築の言語教育・学習への融合）

（発表言語：英語、同時通訳はつきません）

要旨：Dr. Rebecca Oxford begins her talk with the question, “What is peace?” and offers fascinating answers from participants in two studies, one from the United Arab Emirates and the other from the United States. Then she shares (a) the peace definition from the beloved civil rights leader Martin Luther King, Jr., martyred in 1968; (b) a recent peace challenge written by the late Representative John Lewis; (c) relevant concepts from Japanese peace leaders over time; and (d) her own Language of Peace Model, which is woven into lively, field-tested, easy-to-use language activities for students at high school and university levels. These activities not only expand students’ language proficiency but also help students and teachers develop highly practical, transformative tools of peaceful communication and conflict resolution.

午後の部

言語別ラウンドテーブル（Table presentations）（13：00～16：25）

	Room 1 司会：三ツ木真実・杉江聡子	Room 2 司会：山田智久・小林由子	Room 3 司会：酒井優子・河合靖
Round 1: 13:00～ 14:45	日本語発表 1. 黄愛玲(国立高雄科技大学) 2. 杉江聡子(札幌国際大学) 三ツ木真実(小樽商科大学) 3. 佐藤淳子(北海道大学大学院生) 指定討論者：中津川雅宣(札幌国際大学)	日本語発表 1. 飯田真紀(東京都立大学) 2. 小林由子(北海道大学) 3. 片岡恋惟(北海道大学大学院生) 指定討論者：今泉智子(山形大学)	英語発表 1. 呉怡萍, 馮蕙嫻(国立高雄科技大学), 阮家慶(国立彰化師範大学) 2. Joe Geluso(日本大学法学部) 3. 譚翠玲, 河合靖(北海道大学) 指定討論者：大友瑠璃子(北海道大学)
Round 2: 15:00～ 16:25	英語発表 1. 劉得揚, 馮蕙嫻(国立高雄科技大学) 2. アンナ・サヴィヌフ(北海道大学院生) 指定討論者：佐野愛子(立命館大学)	日本語発表 1. 山上徹(北海道大学大学院生) 2. 山田智久(北海道大学) 指定討論者：萬美保(元香港大学)	日本語発表 1. 千葉佳奈美(北海道大学大学院生) 2. 酒井優子(東海大学) 指定討論者：林恒立(国立台中科技大学)

発表要旨

言語別ラウンドテーブル (Table presentations) (1st round 13 : 00 ~ 14 : 45、2nd Round 15 : 00 ~ 16 : 25)

発表 20分×3人/2人、指定討論 5分~10分×1人、討議 35分 (Presentation: 20 min. ×3 or 2 persons、Commentator: 5 to 10 min. ×1 person、Discussion: 35 min.)

Room 1. 司会: 杉江聡子 (札幌国際大学) ・三ツ木真実 (小樽商科大学)

Round 1 <指定討論者: 中津川雅宣 (札幌国際大学)>

1. 黄愛玲 (国立高雄科技大学応用日語系) 「日本語総合能力の育成を目指したプロジェクト学習 (PBL) について」

本報告では、実践的で実用的な日本語教育を目指す、台湾の科技大学応用日本語学科で開講された「日本語簡報」での取り組みについてまとめたものである。近年見られる学習者の日本語学習の学習意欲の低下問題、また、日本語学科の学習者により幅広く社会的な繋がりを持たせ、地域の活性化を図る次世代育成を課題に抱え、この授業ではプロジェクト学習 (PBL) を実施した。

本授業では学習目的を「地域の活性化」「地域理解」「台湾社会との関わり」と考え、日本語はその目的言語と位置付け実施した。本報告では、授業計画、実施方法、結果について述べていく。結果的に、このような実践的で地域との繋がり強く持たせた授業内容は、学習者の学習意欲を高めるのに効果的で自身がクラス地域に対するより強い愛着もを持たせられることが分かった。

2. 杉江聡子 (札幌国際大学) ・三ツ木真実 (小樽商科大学) 「タンデムラーニングにおけるトランスランゲージングを考える」

タンデム・ラーニングは、母語の異なる学習者どうしがペアを作り、使用言語や学習時間を主体的に選択しながら言語を入れ替え、対話を通じて外国語を学ぶ自律学習形態である (河合, 2019)。本研究では、日本語を学習する留学生と英語を学習する日本人学生のタンデム・ラーニングの中で translanguaging を行いながら意味交渉 (negotiation of meaning) (Varonis & Gass, 1985) をしている場面を対象とし、インタラクションのプロセスを質的に分析する。学習の動画記録から translanguaging が発生している場面を抽出してインタラクションの詳細を記述・描画し、学習の促進が期待される部分とそうではない部分を分類する。分析結果に基づき、どのような学習者支援や教授設計上の工夫が translanguaging のメリットを最大化するか、あるいは translanguaging が適さない教学上の条件とはどのようなものかについて考察する。

3. 佐藤淳子 (北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生) 「協働的対話での「気づきの共有」は、第二言語習得を促進するか」

Schmidt (1990) は第二言語習得には、周囲のさまざまな刺激の中から特定のものに焦点を当てる「気づき」が必要不可欠であるとする仮説を唱えた。後に Gass (1997) はこの気づきの概念を「統覚 (apperception)」と表現し、第二言語習得の認知プロセスモデルの入り口に位置づけた。また、Swain (1995) はアウトプット時

の「気づき」も習得を促すとする仮説を唱えている。我々は第二言語でアウトプットをするとき、時に、言いたいことはあるのに、どう言ったらいいのかわからないという事態に直面する。このような穴に気づくこと (noticing the gap) で、その後に触れるインプットの中での気づきが促進されるという。

一方、Long (1983 など) のインタラクション仮説や社会文化主義の影響を受けて、第二言語習得研究でも'90年代頃から協働学習が注目されているが、管見では協働学習とアウトプット時の「気づき」に焦点を当てた研究はあまり見られない。しかし日本語教師として現場に立っていると、ふさわしい言語形式が出てこない時に学習者同士が「あー、何だっけ」「わたしもわかりません」「あ、〇〇?いや、△△?」などとインタラクションを行う場面によく出くわす。本研究では、このようなギャップ・シェアリングが第二言語習得を促進するのではないかという仮説を立て、その検証を行っていく。

Round 2 <指定討論者：佐野愛子（立命館大学）>

1. Te-Yang Liu, and Hui-Hsien Feng (National Kaohsiung University of Science and Technology): *Exploring the relationship between complexity, accuracy, and fluency in L2 writing process*

To observe the second language writing development, complexity, accuracy, and fluency (CAF) has been utilized for observation. However, most studies have focused on learners' "writing production" (e.g., Barrot & Gabinete, 2019; Meihami, 2017; Larsen-Freeman, 2006) instead of their "writing process." Hence, the present study aims to explore the relationship between CAF in Taiwanese EFL learners' writing process. The learner corpus consists of 57 argumentative essays with their recorded writing process from English majors in junior year in a technical university in Taiwan. The CAF indices were retrieved through various methods:

1. The complexity indices were retrieved from Second Language Lexical Complexity Analyzer (LCA) and Syntactic Complexity Analyzer (SCA) invented by Lu (2010).
2. The accuracy index was hand-coded following the grammatical error categories based on Ferris' (2006) study.
3. The fluency indices were suggested by Wolfe-Quintero et al. (1998).

The CAF indices were calculated for every 10 minutes of writing to investigate the relationship between CAF from the beginning to the end of the learners' writing performance. The results of the relationship will be reported in this presentation.

2. Anna Savinykh (Hokkaido University Graduate Student) : *Pedagogical needs in Russian of Russian-speaking children in Japan: Considerations from heritage language learning viewpoint*

For last 30 years Russian-speaking children population in Japan is significantly increased. In contrast to non-heritage speakers, heritage speaker children have different pedagogical needs which are associated with incomplete acquisition and attrition of heritage language. To find out their pedagogical needs, we review previous research of heritage language learners' Russian language competence in America, Europe, and Japan. Comparing these results to "native speakers" pedagogical needs in Russian, we could say that heritage speakers need different educational materials. Also we check parents' motivation and teachers' goals in studying Russian in Japan and

make some considerations about educational approaches depending on children language proficiency, feasible time, and parents` educational goals.

Room 2. 司会：山田智久（北海道大学）・小林由子（北海道大学）

Round 1 <指定討論者：今泉智子（山形大学）>

1. 飯田真紀（東京都立大学）「中国語と日本語の<ジャーナイカ>」

日本語の「ジャーナイカ」（及びいくつかのバリエーションを含む）という文末表現は「判定詞（だ/である）の否定形＋疑問文末助詞」という構成から成る「ではないか」に由来する。一方、広東語や北京語といった中国語においても、同様に「判定詞の否定形」と「疑問文末助詞」の組み合わせから成り、日本語の「ジャーナイカ」と意味機能的に似た表現がある。そこで、本発表ではこれらの表現を<ジャーナイカ>というカバータームで呼ぶ。本発表はまず、広東語では、北京語と異なり、対事的<ジャーナイカ>と対人的<ジャーナイカ>が区別されており、後者が特に文法化していることを示す。そして、広東語に見られるこの区別が日本語（東京方言・大阪方言）においてどのように反映しているかを言語横断的に検討する。

2. 小林 由子（北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部）「多層言語環境としての日本の大学と日本語学習者の「当事者性」

「当事者研究」は精神医学の分野で当事者である患者が自らを研究するという実践から始まっているが、熊谷（2020）では、当事者研究における当事者に専門家や多数派も含め「すぐに妄想にとらわれてしまう脆弱な存在」としている。上級日本語学習者へのインタビューでは日本の大学における留学生の日本語使用は学習環境などからの影響による学習観・日本語使用感により左右されていることが伺える。本発表では、「多層言語環境」として日本の大学をとらえ、大学における留学生の日本語使用を学習者自身の「当事者性」という観点から検討したい。

3. 片岡恋惟（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生）：「日本の大学教員を対象とした教育不安に関する研究について」

日本では、初等・中等教育機関と高等教育機関において、教員養成の過程に大きな違いがある。例えば、大学教員になるために資格の取得や教職課程の履修の必要はなく、また大学には学習指導要領は存在しない。これらは教員の認知的側面、特に教員や教員を志す学生が抱く教育に対する不安に少なからず影響を与えていると考えられる。しかし、日本のストレス研究において、高等教育機関、つまり大学教員や大学院生を対象とした研究は非常に限られており、十分に検討されているとは言えない。特に不安が大きいと思われる大学教員初任者や教員を目指す学生がどのような不安を抱いているのか、またそれは他の関連要因とどのような関係にあるのかについて明らかにすることは、昨今その重要性が指摘されているFD（Faculty Development）やPFF（Preparing Future Faculty）活動を実施していく上で、また各教員が自身の教育活動を相対化していく上で重要な資料を提供するものと考えられる。

本発表では、大学教員を対象とした教育不安に関する研究を中心に、これまでの日本の教育機関におけるストレス研究について外観し、その研究意義や得られた成果、知見を確認した上で、自身の今後の研究の方向性について述べることにする。

Round 2 <指定討論者：萬美保（元香港大学）>

1. 山上徹（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生）「理想的 L2 自己の違いによるトランス・ランゲージングへの態度の違い」

本研究の目的は、トランス・ランゲージングに対する態度と異なる理想 L2 自己のタイプとの関係を分析することである。学習指導要領の中では、英語の授業は英語で行われるべきであるとされている。しかし L2 でのコミュニケーションの活動中に、すべての学生が随所に L1 を使用しているという報告がある（Aoyama, 2020）。この結果から学習指導要領と実際の英語の授業との間にはギャップがあることは否めない。近年、学習者の言語選択と L2MSS (L2 Motivational Self System)、とりわけ理想 L2 自己との関連が最も強いとされている（Lee, & Lo, 2017; Özkaynak, 2020）。しかし、学習者がそれぞれ持っている異なるタイプの理想 L2 自己が、トランス・ランゲージングに対する学習者の態度の違いに関係するかどうかに関しては、分析が行われておらず、本研究ではその分析を行なっていく。

2. 山田智久（北海道大学）「タンデム学習での使用言語を学習者はどのように決定しているのか」

本発表は、日本人学習者と留学生の混在クラスである「タンデム学習」において、学習者はどのように使用言語を選択しているのかについて、授業観察をもとに考えるものである。

本発表で扱うタンデム学習クラスは、日本人学生 19 名と日本語を母語としない留学生 19 名で構成されている。このクラスでペアを組み、毎回異なるトピックについて話す活動をオンラインで全 14 回行った。使用言語に関しては、英語の時間 30 分、日本語の時間 30 分、使用言語の決まりなしの時間 30 分と分けた。特に、最後の使用言語の決まりなしの時間は 4 名でグループを作り、自由に話してもらい、この時間を毎回録画して観察した。

観察の結果、使用言語は、グループ内で言語運用能力が低い学習者に合わせて決められる傾向が窺えた。すなわちグループに日本語初級学習者がいる場合は、そのグループは英語で話したり、重要な単語を英語で伝えて確認したりという行為が観察されたということである。

上記のように、教師が使用言語を設定せずとも使用言語が自然と決まる可能性があるという仮説を考慮すると、グループ編成を丁寧に考えることで授業内の活動のある程度方向付けることができるのではないかと考える。

Room 3 司会：酒井優子（東海大学）・河合靖（北海道大学）

Round 1 <指定討論者：大友瑠璃子（北海道大学）>

1. Yi-Ping Wu, Hui-Hsien Feng (Dept. of English, National Kaohsiung University of Science and Technology), and Jia-Cing Ruan (Dept. of English, National Changhua University of Education): *Translanguaging for EFL Learner's in Taiwan: A Pilot Study of Students and Teachers' Perceptions and Attitudes*

Due to the multilingual language policy carried out in the last decade, Taiwanese students are required to receive the local language education and are supposed to grow up multilingual. Besides the national language, students who acquire English as well as other indigenous languages with various level of proficiency have potential to develop multilingual repertoires. In the language classroom, the instructional language is either in English or in Mandarin; it is observed that English teachers in Taiwan have been translanguaging when teaching English through Mandarin. This

paper explores what students and teachers think and feel about the translanguaging practices in English class. A questionnaire survey is adopted to explore the attitudes and opinions of experienced TESOL teachers and EFL learners at the university level. The overall findings will reveal whether students' multilingual repertoires are recognized and utilized appropriately to enhance their English learning and communication ability.

2. Joe Geluso (Nihon University, College of Law): *Frequency and dispersion in keyword analysis: Comparing and contrasting statistical methods*

Keyword analysis is a statistical method that identifies words or phrases that occur statistically more frequently in a target collection of texts (i.e., a target corpus) when compared to a reference collection of texts (i.e., a reference corpus). Stubbs (2010) proposed that keywords characterize individual texts, and “indicate the propositional content of texts” (p. 25). Scott and Tribble offered ‘keyness’ as “a quality words may have in a given text or set of texts, suggesting that they are important, they reflect what the text is really about... What the text boils down to” (p. 55-6). Traditionally, keyword analysis has drawn on chi-square or log-likelihood to compare observed and expected frequencies of words between a target and reference corpus. However, in the last decade there have been numerous critiques of these methods as significant results can be found by dint of frequency and dispersion. These critiques have led to a push to experiment with other methods that focus effect sizes and dispersion such as odds ratios and text dispersion keyness (TDK), respectively (cf. Egbert & Biber, 2019; Gabrielatos, 2018; Jeaco, 2020; Pojanapunya & Todd, 2016).

In this presentation, I will share quantitative and qualitative findings comparing the results of a keyword analysis using four different statistical methods that vary in terms of their prioritization of frequency and dispersion: log-likelihood, odds ratio, t-test, and TDK. The target corpora used for the analyses comprise a custom compiled collection of faculty publications from two PhD-granting programs in applied linguistics in North America. The reference corpus was compiled via a random sample of journal articles from 30 top journals in applied linguistics spanning 1996 to 2017 and consists of approximately 4.5 million words. Compared to log likelihood, odds ratio favors more faculty-specific words while the t-test and TDK prioritize more general and evenly dispersed words. Interestingly, the t-test identifies words that are generally more dispersed than the TDK statistic. Implications about the choice of statistic for keyword analysis will be discussed.

3. Chui Ling Tam, and Yasushi Kawai (Hokkaido University): *Classifying translanguaging interactions in YouTube videos and Podcast audio files.*

The mixed language uses of second language speakers have traditionally been viewed as lack of target language competence. In language contact situations, however, the mixture of two or more languages is a common practice among multilingual speakers. It is highly probable that the multi-layered language environments that result from technological advances in both transportation and information transfer promote mixed language uses to create and to exchange meanings among members of the community. Translanguaging is a recent cover term that refers to the act of communication

using plural languages as resources for self-expressions. Sixty-nine instances of translanguaging among Japanese and English bilinguals in seven YouTube videos and eleven Podcast audio files were categorized based on two different classifications: conversational functions and syntactic categories. Conversation functions include interjection, reiteration, message qualification, and expressive function (Gumperz, J. J., 1982; Appel, R., & Muysken, P., 1987), while syntactic categories include nouns, sentence ending particles, particles, dependent clauses, interjections, sentences, tag questions, translations, and adjectives. (Poplack, S., 1980). In this presentation, the results will also be analyzed in three areas: negotiation of meaning, back-channeling (aizuchi), and sentence final expressions to determine how translanguaging conversation strategies can be developed.

Round 2 <指定討論者：林恒立（国立台中科技大学）>

1. 千葉佳奈美（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生）「日本語母語話者同士の会話に見られるトラブル発生と理解の示し方」

日本語教育における会話指導では、相手の話が理解できなかったこと（以下「トラブル発生」）を示す行為と、理解できたこと（以下「理解」）を示す行為は別々に指導されてきた。本研究では会話分析の視点を取り入れ、「トラブル発生」と「理解」の表し方を別々に指導するのではなく、表裏一体のものとして指導することを検討する。会話分析ではトラブルを解消することを「修復」と捉える。修復には、トラブルの発生を顕在化し、その修復を相手に求める行為である「聞き返し」が含まれる。また、理解を示す行動としては「あいづち」が挙げられる。従来の日本語会話教科書では、聞き返しとあいづちは異なる項目が立てられ、別々に指導されてきた。しかし、実際の日本語母語話者同士の会話場面では、積極的な聞き返しだけでなく、「理解を示さない」ことでトラブル発生を示す場合がある。本研究では日本語母語話者同士の会話を分析することで、どのようにトラブルが発生している、あるいは発生していないことを示しているかを観察し、日本語教育へ還元できる要素を検討する。

2. 酒井優子（東海大学）「協働学習型意見交換タスクにおける学習者の使用言語と機能の量的研究」

高等学校学習指導要領（文部科学省，2018）は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を挙げ、生徒が課題に対して主体的・協働的に学ぶ協働学習，具体的にはディスカッション等，他者と対話が図られるような言語活動を推奨している。L2の使用を求める協働学習において学習者がL1またはL2を使用するときにはどのような場面で，どのような機能があり，またどのくらい使用しているのか，学習者同士のやりとりの場面から調査し，実態を把握する必要がある。

本研究は，協働学習として意見交換タスクに取り組むときの日本人英語学習者の日本語(L1)と英語(L2)のトランス・ランゲージングを観察するものである。4人一組になって与えられたトピックについて意見交換をするタスクを録画した発話データとstimulated-recall interviewの手法を用いたインタビューを基に，社会文化理論に基づく機能に基づきコーディングを行い，タスク中の学習者のL1・L2それぞれの発話頻度と機能について量的に比較・分析を行った。さらにL2習熟度の違いにより，言語使用量および機能にどのような違いが見られるかについて量的に比較・分析した結果を発表し，協働学習におけるL1の役割について考えたい。